

英語学習を振り返りながら・・・^(※1)高普第8回卒 柚原 俊一^(※2)

高校に入学したての頃は、日曜日になると、次の日が来るのが待ち遠しいくらいで、ワクワクした気持ちで登校した。クラスメートの挙止や高校の先生の授業が真新しく、刺激的に感じられたのである。

入学した時のクラスのまま、進級、卒業したかったが、1年生の時の12月頃から半年ほど病気で休学してしまい、進級させてもらえず、人よりも1年長く在学した。

さて、英語は、鎌田^(※3)、横田^(※4)、持館^(※5)の3先生に教えを受けた。

鎌田先生の歯切れのいい発音と、断片的であるが、文章例や、講義で出てきた単語が頭に浮かぶ。

英文法は、はじめは横田先生から授業を受けた。先生は、英語が上達する3つの重要な事柄を挙げられた。英語の熟語の例文を暗記すること、単語を覚えること、あと一つは確か英文法を理解することではなかったかと思う。参考書もいくつか示された。

さっそく、熟語例文の暗記は小野圭次郎の英文の解釈法という参考書を使って、朝起き掛けの空いた30分間やり、単語は豆単を使って、汽車通学の行き帰りを利用して暗記、丸かじりに近い方法で、1ページから勉強を開始した。

振り返ると、単語暗記のやり方などは、非科学的で、時間をかけた割には記憶にはあまり残らず、非効率的であった。始める時に、自分は将来どう英語を使うかをイメージして、効率的な勉強法を十分に考えるべきであった。

単語を覚えるのであれば、基本単語からはじめて、語源・由来を理解することから入るとか、主要な接続語、接尾語を覚える、外来語から類推できる単語を整理してみるとか、頭に入りやすくして記憶に残る方法を種々工夫すべきであった。

また、読解力のレベルに応じて、ハーンの「怪談」のような副読本を分からない単語は想像して読み、必要に応じて訳注の重要な単語を覚えることなどに、時間を割り当てるとかの方がよかったとも思う。

丸かじりでも、大学入試での英語の受験の時、問題に手を付けられなかったということもなかったように思うし、大学の教養課程での英語の授業でも特別困った思いをした記憶はないから、高校での持館先生によるじっくりと教える授業や他の先生の授業からの蓄積が大きく、それなりの力はいったのだろう。

卒業して原研に入った。初めの所属は、米国から導入する原子炉の建設室だった。入るとすぐに、英文の分厚い運転説明書等を何冊も渡され、読まされ、こういうことで英語力が必要なのかと思った。

その後、動燃（現核燃料サイクル開発機構）に出向して、米国のエネルギー省の研究開発機関に、原子炉機器の開発状況調査のため2年間滞在した。滞在期間中は、エネルギー省の幾つかの研究開発機関にも、定期的に連絡をとって関連する研究開発の進展の状況を調査する必要があった。

そこで困ったのである。

電話での相手の説明が多々、聞き取れないのである。そこで、聞き返すのであるが、まだ分からない。もう一度聞く。

それ以上は聞き返せなかった。

米国滞在では、自らの英語ヒアリングの貧しさ、話す力の貧しさ、誤り発音の多さを認識させられた。

わが国が世界に伍していくためには、多くの分野で外国人との英語での対等の応接は欠かせない。自らの感覚では、英語力は高校までの努力でほとんど定まってしまうものと思う。

願わくは、ネイティブ・スピーカーの外国人講師のより多くの登用を含めて、中学・高校での一貫した科学的で効果的な英語学習法が確立されることを願っている。

(「茨城支部四十周年記念報」平成15年より一部省略)

(※1) 相馬高校百二十周年記念誌『乗り越えて その先へ』(2018(平成30)年10月20日発行)

「卒業生からの寄稿」(馬城会茨城支部会報)から

(※2) 昭和31(1956)年卒、鹿島出身。

(※3) 鎌田昌二郎 相中第14回、大正5(1916)年卒、中村出身。

相馬中学～相馬高校教諭として新採用から定年まで勤務(大正9～昭和32年)。(「相中相高百年史」資料編から)

(※4) 横田武信 相中第20回、大正11(1922)年卒、中村出身。相馬高校教諭/教頭(昭和24～33年)。

(「相中相高百年史」資料編から)

(※5) 持館 栄 相中第21回、大正12(1923)年卒、中村出身。相馬中学～相馬高校教諭(昭和20～31年)。

(「相中相高百年史」資料編から)

(転記&※脚注 村山)